

## エレミヤ書18章1-6節 「陶器師なる我が神」

### 1A 神の主権と力

1B 陶器師なる神

2B 状況というろくろ

3B 粘土なるイスラエル

### 2A 服従という理解

1B 神の愛

2B 抵抗

## 本文

エレミヤ書 18 章を開いてください。私たちの聖書通読の学びは、先週で 17 章まで来ました。午後礼拝で、18 章から 20 章までを一節ずつ読んでいきたいと思いますが、今朝は 18 章 1-6 節に注目します。「1 主からエレミヤにあったみことばは、こうである。2 「立って、陶器師の家に下れ。そこで、あなたに、わたしのことばを聞かせよう。」3 私が陶器師の家に下って行くと、ちょうど、彼はろくろで仕事をしているところだった。4 陶器師は、粘土で制作中の器を自分の手でこわし、再びそれを陶器師自身の気に入ったほかの器に作り替えた。5 それから、私に次のような主のことばがあった。6 「イスラエルの家よ。この陶器師のように、わたしがあなたがたにすることができないだろうか。…主の御告げ。…見よ。粘土が陶器師の手の中にあるように、イスラエルの家よ、あなたがたも、わたしの手の中にある。」」

預言者エレミヤは、主によって、このように陶器師の家に連れて行かれました。おそらく、エルサレムの南にあるヒノムの谷のところにあつたと思われませんが、そこで陶器師がしていることを見させてもらい、その過程を見つめています。陶器師は粘土を練ります。それから、その塊をろくろに載せて、足で回転させ、指で押していき、形を作っていきます。粘土も固い部分が出てくると、そこに圧力を入れますが、どうしてもうまく行かない時があります。そうすれば、またやり直す時もあります。エレミヤが見たのは、そのやり直す部分です。ある程度の形ができていたのですが、もう一度やり直して、ろくろを回転させ、新たに他の器に作り替えました。

### 1A 神の主権と力

そして、このことを見せた理由を主は語られます。「粘土が陶器師の手の中にあるように、イスラエルの家よ、あなたがたも、わたしの手の中にある。」私たちは、「人は、神の御手の中にある」という言葉を使いますが、ここは、そのことを表しています。箇所です。神が、陶器師であられます。そして器のための粘土が、イスラエルです。それから、ろくろは、イスラエルを取り巻く状況と言ってよいでしょう。網が陶器師、陶器は私たち、そしてろくろは私たちを取り巻く状況や環境です。イザヤ書においても、イスラエルの残りの民が主にこのように祈りました。「64:8 しかし、主よ。今、

あなたは私たちの父です。私たちは粘土で、あなたは私たちの陶器師です。私たちはみな、あなたの手で造られたものです。」

### 1B 陶器師なる神

陶器師と陶器の間にある関係は何でしょうか？それは、「陶器は、陶器師の意のままにある」ということです。陶器師が神であれば、神の絶対的な主権と力の中にあるということです。私たちはこれまで、エレミヤが預言者として主に執り成しの祈りをしている場面をずっと読んできました。ユダの民が救われることを願って、彼らを救ってくださいと願っているのに、主は、「わたしは、あなたの祈りを聞かない。」という、とてつもないお答えをいただきます。エレミヤは、人にある罪の深さ、直りようもない心、その陰険という現実を直視しなければならなかったのです。彼は、自分の置かれている状況を受け入れるのが、とてつもなく辛かったのですが、それでも主はご自分の意志を曲げられることはありませんでした。主ご自身に完全な主権と力があります。人が、これは、神が造り主であられ、私たちが造られたものであることを考えれば、至極当然のことです。

人間は、自分の意のままにできるという高ぶりを持っています。バビロンの最後の王にベルシャツアルがいましたが、彼は宮殿で、酒乱の宴会を催していましたが、かつてエルサレムから持ってきた神の宮の器を使って、自分たちの神々、偶像を賛美しました。「天地を造られた神などいない。私たちにはバビロンの神々がいるのだ。」と豪語していたわけです。しかし、ダニエルはベルシャツアルに言いました。「ダニエル 5:23 それどころか、天の主に向かって高ぶり、主の宮の器をあなたの前に持って来させて、あなたも貴人たちもあなたの妻もそばめたちも、それを使ってぶどう酒を飲みました。あなたは、見ることも、聞くことも、知ることもできない銀、金、青銅、鉄、木、石の神々を賛美しましたが、あなたの息と、あなたのすべての道をその手に握っておられる神をほめたたえませんでした。」この日の夜、彼はメディア・ペルシヤの連合軍によって殺されます。ですから今、神々を賛美しているその息も、すべて神の御手の中にあるのです。自分で呼吸などできていないのに、なぜか自分の意のままになると思いこんでいます。しかし、自分の命は完全に、神の主権と力の中にあるのです。

そして、陶器師にある第二の特徴は、「器となる粘土に集中している」ということです。自分の意図している器にすべく、並々ならぬ集中力を注いで、その粘土を見つめ、手直しし、形を変えていきます。これが、神が私たちに対する思いであるということを知る必要がありますね。神は、ご自分の知性と知恵を用いられて、その全神経を集中させて、我々、陶器に向かってくださっています。詩篇 139 篇にはこう書いてあります。「139:17-18 神よ。あなたの御思いを知るのはなんとむずかしいことでしょう。その総計は、なんと多いことでしょう。それを数えようとしても、それは砂よりも数多いのです。」

そして、第三の特徴として、「技能を持っている」ということが挙げられるでしょう。陶器師は、単なる粘土を陶器にする知恵と知識を持っています。その緻密さは、造り主であられる神がこの天地、

自然界、生物、そしてご自分のかたちである人を見る時に、観察、確認することができます。「詩篇 8:3-5 あなたの指のわざである天を見、あなたが整えられた月や星を見ますのに、人とは、何者なのでしょう。あなたがこれを心に留められるとは。人の子とは、何者なのでしょう。あなたがこれを顧みられるとは。あなたは、人を、神よりいっかか劣るものとし、これに栄光と誉れの冠をかぶらせました。」天体にある秩序、自然界にある秩序を見れば、私たちは圧倒されます。これらをすべて造り、造るだけでなく、その秩序を維持できるよう保っておられます。そして、その被造物の王様として、人を神は造られました。栄光と誉れの冠をかぶせられた、と詩篇の著者は言っていますが、人は神のかたちに造られました。「創世 2:7 その後、神である主は、土地のちりて人を形造り、その鼻にいのちの息を吹き込まれた。そこで、人は、生きものとなった。」人というのは、小宇宙とも言われますね。人体の細胞一つとっても、その中身はまるで、銀河系の宇宙を見ているような様相を持っています。

そして第四の特徴として、「予め計画を持っている」ということです。初めから、「このような器にしよう」という見通しを持っています。何か、物事に取り組む時に、「では、この仕事の見通しはどうなっているのか？」ということは考えなければ、その人は無能であると言われるですね。陶器師については、尚更のことです。ろくろに置いてから、いろいろいじってみて、それでこの器ができた、ではありません。すでに構想を練っていて、そしてあらゆる知識と知恵、経験を駆使して、その粘土に集中し、そして器を作り上げるのです。ですから、神も予め計画を立てておられるということ、私たちのために初めから終わりに至るまで、何を行なわれるか定めておられることを知ることは大事です。「ローマ 8:28-30 神を愛する人々、すなわち、神のご計画に従って召された人々のためには、神がすべてのことを働かせて益としてくださることを、私たちは知っています。なぜなら、神は、あらかじめ知っておられる人々を、御子のかたちと同じ姿にあらかじめ定められたからです。それは、御子が多くの兄弟たちの中で長子となられるためです。神はあらかじめ定めた人々をさらに召し、召した人々をさらに義と認め、義と認めた人々にはさらに栄光をお与えになりました。」

## 2B 状況というろくろ

そして、「ろくろ」を考えてみましょう。ろくろは、先ほど申し上げたように私たちの周りの状況や環境です。私たちの命と生活が置かれているその状況は、すべて神が回しておられるという事実です。神が支配しておられて、それは、今、読んだローマ 8 章の箇所にあるように、「すべてのことを働かせて益としてくださる」というご計画の中で進行しています。その状況というのは、私たちは粘土でありますから、何が起っているか分からないということは、しばしばあります。ですから、「自分は理解できていないけれども、しかし、主がすべてのことを働かせておられることは知っている。」ということは知っています。そして、信仰によってそれは良い神の意図があって、それらのことが起っていることを知っています。「エレミヤ 29:11 わたしはあなたがたのために立てている計画をよく知っているからだ。…主の御告げ。…それはわざわいではなくて、平安を与える計画であり、あなたがたに将来と希望を与えるためのものだ。」

けれども、私たちがその状況を主にあって受け入れ、感謝し、喜んでいるという姿勢が必要になります。「1テサロニケ 5:18 すべての事について、感謝しなさい。これが、キリスト・イエスにあって神があなたがたに望んでおられることです。」けれども、状況に対して不満を鳴らすということは、言い換えるとその状況を回しておられる神に対して不満を述べていることになります。イスラエルの民が、荒野の旅において肉がないと言って、モーセとアロンにつぶやきましたが、主は天からのマナを与える約束をされました。そしてモーセは民にこう言いました。「夕方には、主があなたがたに食べる肉を与え、朝には満ち足りるほどパンを与えてくださるのは、あなたがたが主に対してつぶやく、そのつぶやきを主が聞かれたからです。いったい私たちは何なのだろうか。あなたがたのつぶやきは、この私たちに対してではなく、主にに対してなのです。(出エジプト 16:8)」そのつぶやきは、主に對するものなのです。

### 3B 粘土なるイスラエル

そして次に、器となる粘土である私たちのことを考えてみましょう。まず初めに、粘土自体は本当に価値のないものです。粘土はそこら辺にあるものであり、貴金属のような高価なものとは対照的な存在です。私たちは、この粘土自体に価値があるかのように、自分自身を探ることがあります。けれども、そこには、がらくたしかないということに気づくのは、時間の問題です。自分は自分であると認めるところに、私たちは安息があります。この世は、私たちに何か価値あるものを見いださなければいけないのだという声を上げつつけています。すると、「疲れる」という言葉がありますね。自分ではないのに、それ以外のものになるということは人を疲れさせます。

しかし、そのままいながら、輝くことができるのです。それは自分自身に価値があるということではなく、輝いておられる神ご自身がおられるというところに輝きがあります。「2コリント 4:7 私たちは、この宝を、土の器の中に入れていたのです。それは、この測り知れない力が神のものであって、私たちから出たものでないことが明らかにされるためです。」私たちは土の器であります。しかし、その器に神という宝が与えられている時に、その力は神から来ていることを知ります。

そして神は、ご自分の栄光を入れるのにふさわしい器を造ってくださる、その過程に私たちがいるのだということは必要です。「エペソ 2:10 私たちは神の作品であって、良い行ないをするためにキリスト・イエスにあって造られたのです。神は、私たちが良い行ないに歩むように、その良い行ないをもあらかじめ備えてくださったのです。」私たちは神の作品です。ですから、主は土のような私たちに、限りない可能性を見いだしておられます。どのように、ご自分の恵みの栄光を輝かすか、そのことを楽しみにしながら私たちを取り組んでおられます。

何でもないものを、人々は何でもないと思わずかもしれないですが、それを限りなく高価なものに変える人々はいますね。私がしばしば見入ってしまう、ネットに流れる動画は、そこら辺にあるバケツを使って、路上演奏をしているドラムの演奏者です。本当にバケツなのですが、それを打って出てくる音で、とてつもないリズム感のある音楽を奏でるんですね。そのドラマーは、そのバケツが

ただの捨てられるようなバケツなどを見ていません。音楽となる音を出す対象物とみなしています。神も同じです。みなさんをキリストにあって救ってくださった、選んで、召してくださったということは、そこにご自分の作品となりえる可能性を見いだしておられるのです。

## 2A 服従という理解

### 1B 神の愛

では、私たちは陶器で、陶器師であられる神の働きにどのように応答していけばよいか、考えてみましょう。主はご自分の目的にしたがって、私たちを変えていきます。けれども粘土にしか過ぎない私たちは、この方がどんな思いを持っておられるのか、検討がつきません。それで、どうしても主に対して、「どうしてそんなことをしているのですか？」と訴えたくってしまいます。イザヤ書に、こう書いてあります。「イザヤ 45:9 ああ。陶器が陶器を作る者に抗議するように自分を造った者に抗議する者。粘土は、形造る者に、「何を作るのか。」とか、「あなたの作った物には、手がついていない。」などと言うであろうか。」

しかし、私たちが神が何をしているかを知る方法は唯一、「従う」ことです。神を信じて、従う、あるいは神の愛を信じて従うことです。服従します。明け渡す、といってもよいでしょう。そこで、神の主権と力を知る時に、もし神の慈しみというご性質を知らなければ、私たちは恐怖に襲われるしかありません。巨大な怪物によっておびえながら暮らさないといけないのか、と思ってしまう。しかし、私たちの主権者、偉大な神は、慈しみ深く、そのご性質は愛であります。「神は愛です。」とヨハネ第一に書いてあります。神は愛なのです。

ですから、この方が陶器師として私たちを押す時に、それは愛の御手であることを知ることは大切です。私たちに苦しみや圧力となって現れる状況があるとすのでしょう。それは、主が何か形あるものを私たちから造ろうとされて、それで圧力をかけられています。そして、私たちが成し遂げた何かがあると思っていたところが、それが台無しになってしまったかに見えるようなことが起こります。けれども、それも主がもっと良い形に変えようとしておられるから起こっている訳です。主は良い意図をお持ちで、それで私たちを練って、清めておられるのです。パウロはこのことを知っていたので、患難さえも喜ぶと言いました。「ローマ 5:3-5 そればかりではなく、患難さえも喜んでいきます。それは、患難が忍耐を生み出し、忍耐が練られた品性を生み出し、練られた品性が希望を生み出すと知っているからです。この希望は失望に終わることがありません。なぜなら、私たちに与えられた聖霊によって、神の愛が私たちの心に注がれているからです。」

### 2B 抵抗

イスラエルの民には頑なな心がありました。堅い部分がありました。陶器師が堅い部分を粘土で見つけたら何をするのでしょうか？そうです、押しつぶすべく圧力を強くかけてきます。これを聖書では、「懲らしめ」と言います。あるいは「躰」と言ったらよいのでしょうか。主の御心になかなか従わないその堅い部分を、主はその決断や選択をさせるままにされます。そしてその罪の結果を、自ら

刈り取ることによって、罪というものがいかに苦々しいものか、それを味わうことによって、自ら罪を憎み、罪から離れるようにさせていただきます。「ヘブル 12:10-11 なぜなら、肉の父親は、短い期間、自分が良いと思うままに私たちに懲らしめるのですが、霊の父は、私たちの益のため、私たちをご自分の聖さにあずからせようとして、懲らしめるのです。すべての懲らしめは、そのときは喜ばしいものではなく、かえって悲しく思われるものですが、後になると、これによって訓練された人々に平安な義の実を結ばせます。」

そしてそれが、全く初めからやり直されることがあります。ここエレミヤ書に出ている場合です。「あれ、形がまるでおかしくなっちゃった。これではだめだ、もう一度やり直そう。」と考えて、初めからやり直すことがあります。これは、堅い所が押しつぶされるより、もっと辛いことです。しかし、ユダの民はバビロンの捕囚の後、七十年後にエルサレムに帰還して、やり直しをすることができます。これも幸いな計画なのです。主は恵みに満ちた方です。もう一度、やり直しの機会を与えてくださいます。

そして、最も起こってほしくないことは、完成する時点で、欠陥が見つかることです。火に通し、ようやく完成すると思ったら、これまで隠し持っていた欠陥がそこで始めて露呈します。その時に陶器師が行なうことは、その陶器を割って捨ててしまうことです。そのような人物が福音書の中に出てきます。イスカリオテのユダです。彼は、自分が不正をしていたことをずっと隠し、イエス様を裏切ることまでしました。主を三度も知らないといったペテロは、またやり直しが与えられた一方で、彼は初めからイエス様に偽っていた、自分を明け渡してもいかなかったのに、付いていっているふりをしていた訳です。彼は、その最後が、「陶器師の畑」のところで終わっています。祭司長から銀30枚を受け取って、イエス様を引き渡したのですが、その後に後悔して、三十枚を返しました。けれども、首をつって死にました。その地所がアケルダマと言いますが、「血の畑」という意味で、陶器師の畑でありました(マタイ 27:6-10、使徒 1:18-19)。

最も恐ろしい罪は、キリストを知っているようなふりをして、実は偽っていたということです。主の前に出る時に、自分が礼服を着ないで王子の披露宴に出席している者が、たとえの中に出てきま(マタイ 22:12)。主の前で、キリストの義を身に付けずに出ていった人のことです。どうか、自分の命を自分を造られた陶器師の手に明け渡してください。その手の内に入ることを、恐れたりしないでください。臆病にならないでください。主は良いお方です。みなさんを栄光に輝く器にするべく、ご自身が中に入ってこようとしておられます。